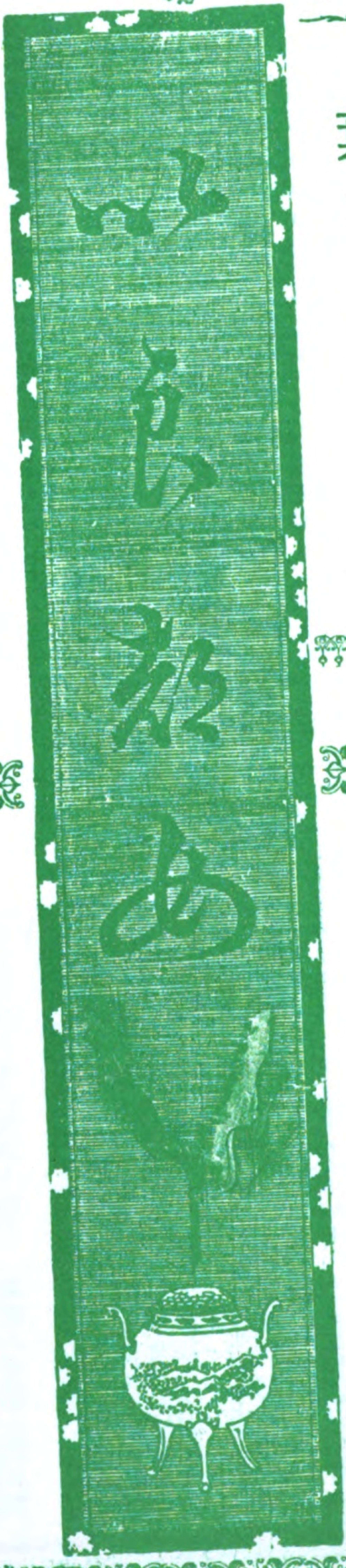
(逓信省認可)

掲載要目

懸賞文藝 櫻蔭天女圖

新出小説 葉ざくら



第八十三号

一冊定價五錢

(別製八錢)

明治廿四年五月廿日發兌

學者の遊戲

美妙譯 るウまよあ軍歌

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

いらつめ第八十三號目次（明治廿四年五月廿日）

無名小説（六）……………………神田一女生
櫻蔭天女圖（懸賞文藝）
愛のいたゞさゞ（二）……………小林東天紅
葉ざくら（續切小説）……………小星女史
學者の遊戯
春の月（韵文）……………………撫箏女史
君は行く（韵文）…………………はつ子
るうまよあ軍歌……………………美妙

いらつめ定價

並製
一部金五錢、府外郵税別に五厘
六部金二拾七錢、府外郵税別に三錢
拾二部金五拾四錢、府外郵税別に六錢
二拾四部金一圓、府外郵税別に拾二錢

別製
一部金八錢、府外郵税別に五厘
六部金四拾七錢、府外郵税別に三錢
二拾四部金一圓八拾八錢、府外郵税別に拾二錢
（別製は最良の洋紙に印刷し且毎号内外國景色、風俗、花卉、美術、動物、英傑、學者、美人等の寫眞を必らず少くも一葉以上添へ、讀者の娛樂に供します。）

●毎月二十日壹回發兌●府内無郵税●金子御差し送りの手續きは小爲替ならば拂渡郵便局とある處に（神田郵便局）と記し受取人欄内に（神田平永町九番地成美社）と御記入の事●郵券代用は五厘切手で一割増の事●見本は五厘切手で並製五錢五厘別製八錢五厘領収の上差し上げます●廣告料一行八錢割引無し

從第七十八號至第八十二號五部版權所有
明治廿四年五月十九日印刷　明治廿四年五月二十日出版
發行人　山田武太郎　東京市神田區平永町九番地居住
印刷人　山本愛之進　東京市本郷區駒込西片町十番地居住
發行所　東京市神田區神田平永町九番地　成美社

○懸賞文藝新題

○第四十六回題（何でもよし）
右　愛兒の夢……………………六月十日〆切

○第四十七回題（何でもよし）
右　盲むすめ……………………六月廿日〆切

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

いらつめ第八十三号（明治廿四年五月二十日）

無名小説

神田一女生

第五回の續

英の婦人が何んでそんな事いふものですか……私だッて御嫁に貰ひ人がなきや獨立しますよ。却て幸ざわ……兄さんの御厄介にはなりませんよ……兄さんこそそんな事ばかりいッてお出なさると、教育受けた婦人で御嫁にあり人はありますまいよ。」

武「却ッてそれが有難いのさ。お前のやうな者に來られてたまるものか……是でも候補者が多くッて撰擧に困るんだ。」

花「候補者なんて、何んな人か知らないけれど、大概の者なら當選しないやうに祈ッて居るでしやうさ。」

おもひ切ッて言ひもいひたり。されど兄は少しも怒る景色も無く、

武「そりや候補者はみんな尤物ばかりさ。」

何處までも兄はからかひ半分、花子は眞赤になッて怒るのを可笑がれば、花子は口惜しさうに目にも涙を浮べ、うつむいて居る。　青山も二人の咄聞かぬもの〻如く、新聞を讀み居りしが、是で爭ひも濟みしか無言故、ふッと新聞を置いて二人の顔を見ると、兄は可笑さうに笑顔を作れど、妹は口惜しげにうつむいてゐる樣子、青山はにこ〳〵して、

青「何です、どうしたんです？　兄さんのちやうそのは得意で珍らしくもないぢやありませんか……兄妹喧嘩なんぞおよしなさい。」

武「わてゝゝ何だ今のは笑談さ。やッきとなッて怒るやつがあるものか。」

どッし〳〵足重さうに梯子を上ッてくる音、下女婢の外に鳥渡手をついて、

下「お孃樣あの月山さんのお孃樣が……」

といふ語の終るか終らぬに下では叔母が、

母「さアどッとおあがりなさいまし……い〻え武一と敏ですからちッとも遠慮なしに。」

花子は鄒子が尋ねて來しと聞きて、喜んで機嫌もなほり、とつかは梯子段の下り口に行き、

花「まアい〻處に鄒子さん來て下さッてよ。私しや獨りでいぢめられて口惜しくッて〳〵。早く上ッていらつしやいよ。」

抑此處は花子兄弟が世話になる叔父の家、兄武一も一月ばかり前に歸朝なし、直ちに仙臺に赴しが、田舍に居てはと五六日前出京せしがまだ歸朝したばかり、家もなければ、花子共々この叔父の家に居るなれとぞ。　弟の明はこの春より慶應義塾に入塾せしとの事なり。

第六回

日暮れ、月行き、年を迎へ、世の人が待ちに待ちし博覽會

も閉會になり、議員選擧も穩に濟み、目出度く國會も開設になり、日本の一大改革も早や三年以前は昔となり、世は穩に、民は太平に安んじ、不平いふべき材料もなき豐かなる世の中となれど、一個私人の間にはそれ〴〵すぐに通らぬふし〴〵あるも免れ難きことにして、東京を百里あまり隔りたるとはいへ、今は滊車あれば、昔の二三十里位なもの、その仙臺の町はづれにむさくるしき下宿屋あり。客もあるか無いか、寂然とせしありさま。　二階に愁然として只一人腕こまぬく少年さし入る月のよければにや、ランプはあれど火ともさず、半身月に照らさるゝその横顔をよく見るに、俯き居れば定かには分らねど、月の光に顔の色は只青白く見ゆるのみ。眉の長く、尻上りなるは、恐らくは癇癪持なるべく、鼻は尋常にて、唇の薄くしまりたるは、適れ能辯家とおぼしく、ふさぎたれば目の大小分からず。　髪のあつくつやゝかなる事女に與へてふッくりした髪になさば、如何に見ばえあることならん。　年の頃十八九に見ゆれど其割りに顔身体共に肉つき瘦たるは病後にもあるべきか。　あゝと嘆息しながら組みたる手をほどし、「實に窮した……進退谷まッたとはこのことだ」立上がッて欄干の側により、頭をもたげて、月を見上げたる目はぱッちりとした黒目勝ちの大なる目なり。　見渡す處一面に田の面なれど、今は秋の初め稲の盛り、田毎に映る月は無けれど、稲葉の波に照る月影、打々響く鳴子の音など、都人の心よりも深く感情を引き起すこととならん。　遙には高き低き山々ならび聳え、見えつ、隱れつ、木の間を洩るゝ燈火も燐か……獵人の住家なるべく、建て續き、雅といふ眺め無き……俗に染みた都とは自から趣きが變り、殊に月の夜などは心も澄みわたり、世の煩はしさをも忘るゝやうなれど、それも見る人々の心々、少年は暫く余念も無く眺め居りしが、何か深く感じたものと見え、

牀上看月光　疑是地上霜　擧頭望山月　低頭思故郷

斯く李白の詩を聲細く吟せしが、又も暫く打案ずる胸中、假に鏡ありとして寫し出せば、「行路難不在山不在川、在人情反覆。」實にその通りだ……考へれば考へるほど愚の至りで……さぞ姉が心配して居るだらう……はやり過ぎた……然し身を保護する爲めに言ひ出した日には、義理ある母を德義上の罪人としなきや……といッて浮々して居た日には馬鹿を見るんだから……なアに精神一到何事か成らざらん、堂々たる男子がどうしたッて志を遂げられんことはない……寧そ僕が居なきやいゝんだと思ッて前後の考へも無く家を飛び出したが實に後悔した乳母を尋ねて靜岡に行ッて見りや仙臺に引移したといふから、はる〴〵こゝまで來て見れば、もう乳母は死んだといふ……あんな奴だから恐らくは僞りも知れんが……實に失望した……あの弟の恩知らず奴が……あゝ匹夫下郎の根生の奴に逢ッ

ちやだめた……でも金さへあればどうかなるけども一文無しに費ッてしまッたし……今更歸へる譯にも行かず……そこに身体も本當でなし……あゝ逃げてなんぞ來なきや善かッた……併し姉から身の上を聞いた時は實に夢のやうで、一時は信じられんやうであッたが……十七年の間繼母とは知らなかッた位可愛がッて育てゝくれた實子の可愛さは又格別のものかなア……情慾のためとまる處になると……實に恐しいもんだ……毒殺……小説にでもありさうで信じられんやうだが……實際明治の今日にあるから……なゝ何しろ實に驚した……賣る物といッてもなし……」

よく〱困ッたものと見え、うッとりとするその樣子、他で見る目も氣の毒の至り。そも〱此書生れ身元はと段々聞いて見ると、實に意外驚きたり。この見すぼらしき書生が彼の月山秀吉ならんとは。月山家は非職にもならず、免職にもあらず、又不慮の災害にもかゝれるにも非ず、依然東京の住居に安居しつゝあるなり。秀吉のみかゝる境遇、いかに想像の及ぶ限り、考への屆く丈思ひ廻らせども、この故かとおもひ當ることもあるべくもおぼえず、されど秀吉の今の胸中に因れど、只危急の事ありて、逐電せしとまでは解し得、その危きこと秀吉を逃亡までおもひ立たせし珍事は何事か、聞きたし知りたしと記者も物ずき丈、委しく探を得たいくたて、なるほど血氣盛りの若者一圖に逐電したも無理のない譯

無名ノ二十五

とばかりでは分からず、まづざッとこんなもの。秀吉の十二の時生れた弟春雄、秀樹夫婦の中の獨り子、その春雄が四つ五つになッて、廻らぬ舌で、お父さん、お母さんといふ可愛らしさ。顏だちは旦那樣そッくりで、愛敬のお有り遊はす處は奧樣生き寫し、お二人の美しい處ばかりお取りになッた若樣と、下女はしたのお世辭が芳子は身にしみ〲と嬉しく生の子持ッて見ると、今まで下にも置かず育てあげた秀吉、あまり可愛く無くなり、旦那樣とこの財產……月山の名跡秀吉にお讓り遊ばすもお思召か……怜悧といへあかの他人、生の子が出來ればそれに讓るが當然と、折ふし秀樹の心引いて見れど義理堅い秀樹一旦どしの心にちかッた一條、殊に春雄も實の子といへ生先きはわからねど、あまり鋭敏でも無さゝうな。秀吉こそ行く末立派なる人物と見込んだ我目は異ふまい。是まで我子も及ばぬほど世話した秀吉何の變りが有らうか……月山の血統が案じるならお靜に子が出來ふ、それを秀吉の子として跡を繼がせればそれでもう……生の子持ッて繼母根生出したと人に譏られるやうな事してくれるなと良人の言葉、でもお世話なさる位なら秀吉の實家の名跡立てゝおやり遊ばすが當然で、死んだ人もその方が却ッて嬉しく感じましやう。なるほどそれも一理ある事ぢやがそれとても秀吉の子を以て繼がせればいゝことだ。あんなことを仰ッて私共に實子といふもののない先きならともかく、この春雄とい

ふもの出來て見ればさうしたものではありますまい。　ああたは實子が可愛くないので御座いますか。　そりや子ぢやもの可愛くないこともないが相續の一條は私の心にもう定めて居るうち、この後こんなこといひ出して、秀吉に聞かれ、妙な感じをさせるやうな事してはいかんぞと何度いッても同じ言葉、芳子は思ひ込んではあきらめがつかぬ、生の子逐ひ出せとでもいはれたやうな心持、良人が秀吉を利口々々といふにつけ、何となく惡らしいといふ感情が出たのが誤り、この秀吉さへなくば……邪魔な奴いッその事と……あの優しかッた芳子が打ッて變ッた心になり、あらうことかあるまいことか、聞くも恐ろしい毒藥、何處でどうして得たものか、折が有ッたらばと思ひくらすうち、芳子の爲めには好時機ともいふべきは秀吉が十七に爲ッた春の末、ふッと胃病に苦しめられ、床に着いた始末、この時ぞと芳子の喜び、子故に迷ふた心の闇照らす光りは無いものか。　あゝてかなし。　或日下女は秀吉の粥七輪に掛けたまゝ、急に買物に出たあと、外の女中も居らぬと幸ひ、そッとその中に一撮……秀吉の命の危さ。　まづこれで安心と、獨りにこ〱して奥に入ッたのを何心なく通りかゝッて見て居た靜子、いつにない母が秀吉の粥焚く鍋に手をつくる不思議さ。　此頃のそぶり可怪しいとおもふことなんでもなし、うッかり油斷はとそッと小もどりして秀吉にふくませ、今日は食事もほしからどとその粥少しばかり茶碗に取ッて、あとで犬にやッて見ると、忽ころりとなッた始末。　秀吉は先きから姉が何をいふことかと却ッて不審に思ッて居るのが今更あッけに取られて心も空、何で母が私を殺す氣になられたか、何な事が氣に障ッたのであらうと、繼しき中の母と知らねば身を悶えて氣を揉むいぢらしさ。　病氣に障ッてはと思へど打明けねば樣子わからど、實は斯く〱しか〲にて、汝とは繼しき兩親、私にも義理ある母なれど、幼き頃より今が今まで隔てなくして生の母とおもひ込んで、少しも疑はねはど慈んで下された母上がかういふ御心になられたのは、やはり生の子の春雄に跡を續がせたい御心で有らうとは大概考へがついてゐると、寐耳に水の我が素性、秀吉の驚きまたゝきもせず、姉の顔見詰めるばかり。　二三年前車引の子といはれた時一時疑ひは起ッたあれど、その後は露ほどもさういふ心出さねば、知るよしも無く、さては左樣でなッたかと知ッて見ると今更隔て心の出るやうな。　それに母の仕打四五年前に知ッたら我儘もいふまい、惡まれる事も有るまいに……何の私はあの財産ほしとはおもはど、釜の下の灰まで弟に讓ッても更々怨とは思ぬと弟が力なゝ、さうあけなげな詞、姉は心の中思ひやッて胸一杯、さアそれにもいろ〱譯があッて、どうしてお前に讓るお父さんのお心……私の實母でゝも有ッたらどうか御諫めの爲やうも有らうけど、いかに隔てぬ

と言ッても義理ある中と知ッて見れバ……さうかと言ッてお父さんの御耳に入れると事が大きく爲ッて大變故それも出來ず、私が及ぶ丈ハどうとも力になッて保護して上る積り、必ず心配せずに少しも早く直るやう……行末ハお互に力になり、ならきする姉弟、おまへに若しもの事あッてハ私の心細さ……青山さんハ見かけによらぬ親切な方、病氣が直ッたらお父さんとも相談して、あの方の家に當分行ッてるやうにしたら安心でもあるし、おまへの勉強の爲めにもなるからと、深切な姉の言葉、今まあとの親々ハ顔も知らず、死んだと聞いた時のかなしさ。　男心に心細くおもッて居る矢先、優しくしてくれる嬉しさ。　何時とて變りのない姉の誠、一きは骨身に染みて有難く、姉とハいふものゝ元と正せバやッぱりわかれ他人なれど、かくまで深切に言ッてくれるハ、所謂る何かの因縁といふものであらう、この姉の爲なら命も惜しくハおもはじと、涙の雫はら〱と膝に落せバ可愛いと心と姉ハ一際不憫さが増し、胸せまッて詞も出ず。　やゝあッて是からも必ず油断をおしでないよ何でも早く直るやうにおしよ血筋もひかぬ他人同志の姉弟が斯くまで深き親情、心の中の暖かさ、如何なる冷水もてそゝぐとも冷やすことハ難かるべく、共に語らバ憂も忘れ、互に相見てハ涙のかほも笑顔となるべし。　殊に人れ心かなしき折に深切に慰めらるゝやも深く感ずるものハあるまじければこの姉弟是より一層深き愛情もて結ばるべく、すべて人の親しきこなたれ心淺くしてかなたれ深きふちのぞめバとてうくきものならんや。

その後姉弟ハ心に心を配り、靜子ハ仙臺秣れ裡岡もとき、食事ハ一々改めて進むる親切、秀吉の身にもならバ、いかに嬉しきことなるべし。　斯くして日を送るうち、危き事二度三度となりぬ。　事成就せずバ氣つかれたりと思さるや。おそましとハおもひながら心あがらせ、とりひき秀吉ハ薄氷を踏む心地。　心ハ痛めながら姉の深切に慰められ、床に臥してから二月ばかり過ぎて全快とまでハ行かねど、稍氣力舊に復し折ふし庭の内散歩するまでに至れり。　芳子ハ望み果し得ず、如何に思ふことあらんか。　我かくまでおなりしは皆姉の情と寐た間も忘れぬ秀吉、先の日の深切ある言葉落涙するまでに深く感じ、何とも姉の言葉に背かずと心に誓ひ居れり。　男の十七といへバまだ乳の香失せぬ子供ながら、根が利口あたちの秀吉、ある日床の上に坐りあがら熟々と行末の事考ふるに、よしこの病癒えて、一度ハ姉れいふまゝ青山方に寓するとも、わが生きてある間ハ母の望遂げられず……又ハ父に我家督望ましからずといへんにも、是亦義理ある中の父生れ落ちてうらの恩も忘れ、不肖の我を慈愛して下さる恩……恩不知といはるゝも心苦し。　さりとて知らぬ先きハ兎も角我身の素性わかッて見れバ、春雄といふ正當れ相續人ある月山家……べん〱とこれ家督となッてハ德義上恥づべき

事、如何に父がいはるゝとも該け引く心なければ……深き所存御承知なき母上、われあッてと……と熱望のあまり如何なる淺ましき恐るべき謀なし玉ふかも圖られず……といッて打附けお我心いふ傳もなし……何しろ我在ッては知りつゝ不道德の行をなさする譯、いツそ逐電して、身を隱さば、只目が一身に衆評は集るのみ。一時は心を痛めらるゝとも長く兩親へ精神上の孝養となり、母の望みを達して、われも亦安全なり、しかして刻苦自立の道立つて後面會なし、當時の罪を謝す時あるべし。さするに如かずとおもひながら、只別るゝに忍び難きて姉の深切、再び慈愛の溫顏に接し、眞情の教誡を耳にするは、幾年の後と定めがたし。寧そ打明け相談せんか、とせんかくせんと種々におもへば、心緒亂れて決し兼ね、忙然とするのみなりしが、ある夜心を勵まして、思ふことありて忍び難きを忍び、親を捨て、敬愛なる姉に離れ、今夜逐電致し、志遂げ名を擧ぐるまでは、再び便り致すまじ、只無きものとおぼし玉てれ、とのみ簡短なる一通を兩親と姉と連名にして殘し、全快も待たず、僅かの金を懷にし、靜岡なる乳母の許尋ねて見れば、仙臺へ引きうつゝた跡、又も引きかへして道を東北に取り、はる〳〵宮城まで來は來りしが、果敢なや人命朝露の如し、二十日ばかり前乳母は無き人の數に入つたと聞いた秀吉の失望落膽、弟の要助と知らぬ者なき欲ばり主義、とうで碌な事でて來はすまいと取つてもつ

かねけんもほろゝれ挨拶、秀吉は血氣さかり、惡い奴と打ものゝり度くおもひながら、胸を摩つて乳母の家を立ち出で、詮方なしに前の下宿屋に宿りしものありとぞ。

東京の家にてはその明る朝とくより姉はいつもの如く弟の部屋音なへば、床もぬけの殼、はて便所かと思ひながら、何心なく見まはす机の上、一通の手紙ありて、讀んで見れば簡短な書置……厭氣にとられて思案も出ず、あれほど姉が言つたのに……盡した誠も感じないのか、あんまりな仕方……一言相談でもすればと怨んでは見られど、又一方から考へると、血氣の若者母があゝした御心になられては暫しもこゝに居るのが嫌と駈け出したものか……お金は持つて居たか……然し一体何處を目的に出たものか……志を遂げ、名を擧げるまでおもひ込んだ樣子を見れば、きつと有爲の人物になるではならうけど、東京の地を離れては……おもひこんだことなら止めはしないうら、何處でどうする考へといふあと私だけにでも話して行けばいゝに……お靜々々と奥で父の呼ぶ聲。

父「是は要用の書類だの、鳥渡机の上に置たらもう春雄がこの通り……よくそろへて置てくれ……中々此頃はいたづらしだして始末にいけなくなつて……今朝は秀吉は如何か？」

靜「それが大變なので御座います。この通り書置を置いてゆふべ逐電したものと見え、居りません」。

第四十回懸賞文藝應募得點

題　櫻蔭天女の圖

●和歌

塵の世のものとも見えぬ櫻はな天つをとめもなかずなごめん…………曉　子（イヨ）

右第四等賞

己が身を胡蝶となして天つ女のさくらかげに舞ひあそぶなり…………仝　上

天つひめ花もねたしと見るまでにゑめる姿のうるはしきかな…………鶯遊女史（トウケイ）

以上二首第三等

●唱歌

（イ）　蘆野潤三郎（イヘシロ）

大和心の友もがな、　語らまほしき花盛り、
枝にうつれる羽衣を　あやしと見ればの木の下に
天つをと女のあそぶなり。　いさこと問はんこの作樂
いつか散るべきこの少女　いつか去るべきいつまでも
作樂も散らじ雨も降れ、　嵐もさわげいつまでも
少女は去らじ日も暮れよ、　月も傾けとこしへに
春は一室を満たすなり。　見る人毎の品評
うつしてこゝに今様ぶり　書きし君におくらばや。

（ロ）　鶯遊女史（トウケイ）

霞みて見ゆるさくら花　かをるばかりに咲きそろふ
その下かげなるをと姫の　姿もさへに遊ぶなり。
あゝ愛らしの乙姫よ、　さかりの花も散るものと
早やとくたちて歌へかし。　五衰の時もあるものを
いざとく立ちてまひ遊べ。　なそれいみじきその姿
さそひし風もあるならば　ときめきのかをり匂はなん。

（ハ）　仝　上

田子の浦邊や羽衣の　松はむかしにかはれども、
ありし昔しとそのまゝに　人のはごとにとゞめたり。
それよはならぬ櫻花　ちり敷くなへよ佐保姫は
たなびく霞きぬとしつ　はるの錦を織りやする？
あれきいみじきこの姿　おとなふ風の有もせバ、
吹きもよせてんその香り、　なとやとゞめん其儘に。

（ニ）　曉　子（イヨ）

いつ見ても　樂しきものこ　うつしゑや。　雪ふる樣
を　見るとれ　夏なは寒さ　身にぞしむ。　春なら
ずして　花かをり、　秋ならずして　もみぢ葉の　眺
めもこれや　うつし畫の　德にこそあれ。　夢にだに
見ぬ天國の　ありさまて　かくあそなふめ　咲き匂ふ
櫻れかげな　もたゞくも　遊ぶ天女の　すがたあそ
げよのとけされ　のぎりなき。　こゝろからなる　その
笑顔　是ぞまことの　笑顔なる。　繪そらおとなも

うせかりよ　うつせし人ぞ　心にくき。　やよ天つ風
とことわに　雲のかよひ路　とぢよかし。　わが頭には
霜を置き、　額に波は　よするとも　うつろそはその
いろをしも　かはりなきその　おもかげを　幾年うけ
てながめまし。　幾年かけて　ながめまし。

（ホ）　美念子（トウケイ）

かをりをくらひ露と飲み、　霞がよばひ雲にいね、
地這ふ蝶と語らふも　共に心はまことなれや。
櫻の花の下かげよ　ころも羽衣ふりそへて、
いみじき舞ひのゆかしさ。　天川乙女に似たるかな、
時とえがはの春の蝶。

以上五曲第四等

（ヘ）　醉香（トウケイ）

未明けやらぬ春は朝　ほのかに霞東天紅
露に色ます花蔭よ　朧よ見ゆる天乙女
花と倶寐の夢さめて、　露を鏡にうす化粧
もつれし髪と梳り、　妙なる花をつまとまて、
かざす花がさ打かぶり、　まばゆく光る羽衣と
捨にし笙を取りあげて　調ふる音も朗かに
雲井はるかにまひ上る。

右審査以外

●文章

（イ）　鶯遊女史（トウケイ）

誰が水莖の跡？　一幅の畵圖、其讃に、

花や花、兩手に花のつらをとり

嗚呼彩雲一簇これが花？　嬋娟たる蛾眉これが花？　何れを眞……何をと假……櫻は是れ花中の絕なるもれ—天女はこの人界と離きた美しきもの—其人間も及ばぬ天上界よ住んで人間も及ばぬ樂しみを爲盡して、却ッて人界の櫻を見て樂しむとはなせ？　三保の浦わの夕なぎに羽衣を松に忘れた天人もあり、良人を扶けて錦を織た織姬もあるにし—然し是れを比べたらバ無論櫻は……色？　色も及バじ。　匂ひ？　匂ひもかなふまじ。　彼の片々として泥中ふ委し、空しく遊人鞋底の花と化し去るバ……これも花の一期—かの花冠と失ふて千歲の榮華も一掬の淚……是れも色界の常—されバ色即是空……眞に是れ花の花……

（ロ）　香圃女史（イガ）

私は樣な無粹な男が此の樣な軸、しかも婦人が畵いた天女の圖なとど持ッて居るのは如何にも不思議だとお疑ひなさるは誠に御尤もな次第、あれをこれよは深い仔細の有る事。話し—此の樣な話しを貴君にするのは甚だお恥かしい事ながら、懺悔の爲め、苦しい胸を押し靜めて、お聞かせ申しましやう。

頃は丁度去年の今頃、向島や上野は櫻の花盛りで、人の心

も浮き立ッて居る頃、私しや少い時から許嫁のして有る、おとしといふ娘の家へ或る日の事招かれました。其日は其所の家にある櫻が盛りだとて、花見の宴を開いたのでした。なま中許嫁がして有ると思へば、人に見られるもうら恥かしく、わざとお年とも遠ざかる様にしてゐました。

遊び歩むお年の羅綾の袂は時々吹き來る春風に飜つて、日頃の美しさは一層の風情を添へ—欲目かは知りませんが、私には丸で畫に畫いた天女の様でした。「天つ風雲のかよひ路吹き閉ぢよ、乙女の姿しばしとゞめん。」あゝ美しやと自分では口の裡で言ッた積りながら、それともつひ口走ッたか、向ふの櫻の下を逍遙して居たお年も莞爾と笑ッて、何か心ありげに振りかへり、彼方へ往きました。

其日は私も家に歸つて、其後五六日經ッてから、花見の禮かた〴〵日曜を幸ひ遊びに出掛けて往きました。折しもお年は傍に人の居ないのを見て、そろ〳〵奥から出て來て、私にかう言ひました——挨拶が濟みましてから「これは拙い者ですけれど、私しが畫きましたの。貴君に差し上げますわ。」と言ッて差し出したのは、まことに此の櫻陰天女の圖—披いて見れば、天女の姿といひ、着色の工合と言ひ、まことに天晴な物でした。驚きの余りに彼れを見れば、定めし胸は動悸は大波を打ッたでしやう、紅の潮が顔へ充ちたを見えて。恥かしさうに首を垂れて、「實は此間花見の時貴君が彼方の櫻の傍で、天つ風…乙女の姿…と仰しやッたので、それを圖案に……こんな者を……」。あゝ間違へも間違ふもの、私しは彼れの姿につひ見惚れて思はず彼な事を、しかも自分は言はない積りであつたが、さて〳〵彼れもそれを……しかし折角の志と思つて、遠慮なく貰ッて歸宅早々直に幅に据らへさしはしたもの、可愛やお年今頃はどこにどうして居る事か、其後間もなくインフルエンザに罹ッて其れから肺を引き起し終に果敢なくなッて仕舞ひました。誠に思へば哀の極、之れが記念に殘らうとは、夢思ひはしませんでしたに。今にも最早や一週忌、花をもあざむく面影は、あれど、天王寺の新墓の下、さて〳〵人間といふものは果敢ない者と思へば、俄かに此世いやになり、それ故此處日暮里の詫び住ひ。時には彼れが事小說に書いては胸の憂さを晴らし、又思ひを増す事の有るも、時々此の軸ながめては……あゝ思ふまい！去年は共に樂しく見た櫻、發失！其れも今は無慘！佛に手向けの花、思へば眼につく者が皆涙の種、此の若い身空で、いぢらしい佛なぶり。語れば猶更思ひを増すのみ。人に知られぬ秘密の涙はどうしてまア乾く暇がありましやうか？

✿　✿　✿　✿　✿

主人が長々と語る懺悔話し。流石に友の身の哀れを催しました。

「それなら君の許嫁か？」

「左樣、かたみに……今思へば……呉れたのさ。」

（八）

水野秀（オホサカ）

天氣麗朗かなる彌生の空、遠山の染出す霞たなびいて、鏡とうつる小川の水も芳ばしき程でそ。　此の快天地とわが物顔に旭に匂ふ花の木蔭に佇めるは、そも誰でしやう？　玉の髪の輝くも、風のかへせる羽衣もいとゞ哀しく懐しゝ。　玉手をあげてさし招き、徐に――いと徐に、

「あゝ和女に諭告せんことこそあれ。　聽け！　櫻の傘を指させとて、霞の衣を纏へとて、風に吹かれて飛ぶぞかし。靜心なく散るぞかし。　富貴尊榮頼むに足らず、必ず頼むに及ばぬ、頼むはそれ誠！　あゝ只誠のみ、誠は天の道、これを守るは人の道なるぞかし。　小心翼々誠にあれ。　努々忘るゝな！　忘るべからず！」

玲瓏の聲嬉しく身に染みて、懇なる言葉はいと尊とく、骨に徹りて三拜九拜、忘れじと思ふ時なそ、鳥聲高けれ。

（二）

平山靜子（ナトリ）

爛漫と咲き亂れた櫻はさながら雲か霞の樣ですけれど、霞や雲は香ひも何もありません。　其馥郁たる香と共に、ひらひら散る花びらのゆかしさ。　古人は空に知られぬ雪などと洒落れた事をいひました。　實に暖かな、心も浮き立つやうな雪なら毎日降ッても差支へはないでしやう。　おや彼處の垂れ櫻の本にゐるのは誰れ？　まアあの美しい顔は水晶でゞも拵へたのか知らん。　あのきりゝッとしまッた可愛らしい口元、秋の漣を湛へた目、新月も及ばないあの眉、あゝ一々數へ盡せないわ……然し不思議、あの着物は……可笑しいいつか見た辨財天のやうだわ……ぢや、あそこに居るのは辨……然しあの後にある羽根、見たやうなもの……あ思ひ出した天女……まさか……昔しは天の橋立だとか、三保は松原だのに天降ッたとかいふが……三保といへば三保子さん……あさう……さういへばあの目鼻立三保子さんに似て居るやうだわ……あそこにゐるのも、一寸御話しして見やうか、あらこッちに向いて笑ッてゐるよ……もし花子さん貴孃何をそんなに考へて御居でなさるの……え〻……何も考へては居ませんけれど……あの失禮ですが、貴孃は……あの……天女とやらで居らッしやるぢやありませんか……さうでも私は夕べ月宮殿の細殿から此下界を見下したらば花が餘りよく咲きましたからそれで……えッそれぢや月の都から僅かの間に御出でなさッたのですか……さうです……たとひどんなに隔ッて居ても私は僅かの間に行き來が出來るのです。　さうですか……それぢや私も御一所に御供が願ひたいもんですが……宜しう御坐いますとも、さア早く行きましやう……はゝゝ……花子さん〳〵、まア貴孃どう遊ばしたの？　くらくら居眠りなさッて、はゝゝ……そんなくだらない事を仰やるもんだから私はそか

しくッて〳〵はゝゝ……おやぢや今のハ何だか貴嬢に似た聲だと思ッたら……ま……否あは、、……あら否あんてや、、餘り貴嬢がおつくりの時間が長かッたもんだから……つひ……はゝゝ……髪結ひが馬鹿たもんですからほんとに失禮でした。私もね、はら先さ貴嬢の下すッた國華ね、此内の櫻蔭天女の圖が餘り善く出來てるもんだから寐言にまで……ほんとよ否なはゝゝ……それはさうと車の用意も出來て居ませうから、早く參りましやう。 え、それぢや御供いたしましやう……一寸貴嬢あの貴嬢のお名が三保子さんだから今日のお花見もね……やッぱり櫻蔭美人……ぢやない天女の圖といふ畫題でも出來さうだ、あゝゝゝ。

以上四章第四等賞　（ホ）　美念子（トウケイ）

新宅の居間に掛けてあるは櫻蔭天女の圖！

＊　＊　＊　＊　＊

「文雄さん御勉强ですねェ。」

「いえなあ……あゝお春さんですか……」

と言いながら急に膝を向けなはし、

「まア御這入んなさい。」

「御邪魔になるといけませんから……」

と口には言いながら其儘座敷に入ッたのは十七八の娘でした。

「何を爲さッてゐらッしやるの？　おや繪？」

あゝ机の傍に近寄らんとすれば、男はあわてゝ手近な書籍で隱しました。

「なぜお隱し爲さるの？　いゝぢやありませんか。　一寸御見せなさい。」

笑ひながら强ひて見やうとしましたが、調子を換へて、

「見て惡いのあら……」

と靜にいッて座にもどりました。　男は今隱したにも似合はぜ、調子を急えて、

「なに……なにさうぢやありません。　だがどうも……」

「惡くなけりや御見せなさい。　どうぞ〳〵お願ひですから。」

今は男も餘儀なさゝうに無言で、蔽せた書物を除けました。見れば一枚の繪絹に立派な四條風の繪が描いてあります。まア一体の風は庭園かとも思はるゝが、爛熳と咲き亂れた櫻の花の間から、ちらッと霞立ちたる遠山の見てる按排などえも言はれません。　其花の下影に一人の天女が佇んで居るのが格好よく、取り分け羽衣の翩々と春風に漂ふて居るのは、五つ六つ花瓣のひら〳〵としてる有樣など、實に妙趣があるので、娘は唯默ッて見て居ます。　男はまた俯れた娘の上から瞰欠て居ます。

「どうも〳〵奇麗ですこと……それは何だか内の庭に似て

るやうでも……。」

「さうでしやう。」

簡短な男の平氣な聲で答へました。が、渠の眼は余所に逃げました。

「庭をお寫しなすッたのでしやう？ 道理で似てますもの、丸でそッくり。 あの岩も、あの池も、さう／＼あれはあの松ねエ。 そしてこの櫻は小町櫻、まア天女の……」

玻璃障子から庭を眺めては繪と見較べ、頻りに感してゐましたが、何を見つけたのかひよいと言を斷らして、今度は我看物と見合はせました。 少時して、今迄は澄し返ッて居た聲が今度は重く躊躇した調子で、

「文雄さん、此繪は？」

と問ひいけた時はた／＼と驅込む八九才の男の兒、投ぐる樣に其處にペッたり、

「姉さんなアに？ 繪？ 繪見てるの？ 其繪はねッ、昨日、姉さんがあの櫻の木の……え〻あの櫻は何とか言ッたッけ、お父さんから教はッたんだが、え丶小松—さうぢやない、小松は好ない奴だよ。 今日も僕に石撲付けたよ。 だけどもなアに負けやしない、直に追ッ掛けて泣かしてやッた。 え丶小ま、えエえエ、うんさう／＼小町櫻た、あの櫻の下で姉さんが毛糸編んでたねエ。 あの時文雄さんが玻璃から覗いて、書いてたんだよ。」

遠慮なき小兒の話、男は穴へでも入り度い、心持、傾向けて居ることが出來ません。 息さへ殺して金佛の樣になッて居ました。 娘が疑ふ胸の亂麻も弟が一刀に斷じましたらうに、何が心に殘ッて居るのか、平調ではありません。

「ほんとに酷い方、人を〱。」

やゝありて、

「文雄さんなぜ私を天女……天女には……」

問へど男は無言です。 無心なる小兒はいつか往ッて仕舞ひ、六疊の坐敷唯しんとして居ます。 が、文雄の胸は亂れかへり早鐘に耳も聾し、思の炎は身を焦して居ます。 娘も深く考へに沈んでるかの樣で、さびしい少時！ やゝありて男はハッと顏を上げ、決心した風で、あたりを見廻し、

「私には眞實天女と見えますもの。」

忍び音の一口、少女が耳には霹靂一聲！

桃（へ）

松乃（イヘレロ）

紅李白花の中かは。 五大州中第一の花と稱ふる山櫻塵世浮世を萬里の外、童顏鶴髮羽衣翩々、好芳微風の襲ふあるかと思はる〻天女の圖、眸を凝し、注視すること良久し。 天女漸く空を歩し來りて、余をさしまねぐ。 身を起し、導かる丶ま〻櫻間を過ぎて、又紅霞の上を往く。 見ゆる限りの櫻花の境、池邊の柳、巖崖の松、紅霞の中をあやなすもいとをかし。 彼の峯の上にて眺めたらんかは、彼の櫻樹の下に坐

しらんには、と思へば身は飄々乎として空を歩し、忽ちに至らるゝ樂しさ。　達意の里、如意の鄕、そもいづこ、此處を措ては？　天女問ひき、語らひき、余の意の向ふ處に導かるゝとは。　柳の如きの風姿にて、遠山の翠色を描ける眉、漾々たる秋波を湛ゆる眼、花も恥づへき顔の中に白玉の齒を少しあらはし、余を顧みて微笑して無言、如何なる心のありてか。　瞼一瞬夢想烟去り、雲消し了り、恍として魂なきが如き眼中、徒らに壁上天女の圖の見ゆるのみ、

橘　さち子（トロケイ）

十（ト）

十疊の間の床にかけてあるは櫻蔭に天女の姿繪、その前にうやうやしくひざまづき、禮してゐるは當家の家臣、内海龜右衛門とて年頃奥を勤むる老年なれば、日毎の忠勤思ひやらるゝ折柄、此家の姫年は七八歳にて、振り分け髮のいとやさしく、色白く、鼻筋通り、口元可愛らしく、笑ふ毎に前齒の少し缺けて、黒みたるが猶愛らしく、何となうけだかく見ゆるも美人のゆかりぞかし。　乳母腰元にかし付れて、此處に來り、床に掛けし掛物にむかひて、うやうや禮となし、何事か祈念しておはす姿の愛らしく、あどきなれば龜右衛門も乳母も涙催ほす折から小性の文彌花生に挿しある花を持來りて、床に置き、これも掛地に一禮して、龜右衛門に對ひ、

「いつか折がなッたら伺ひましやうと存じてゐましたが、一体この御掛物は何のため掛けさせらるゝ事でありますか」

との問ひに答へて、内海しかつめらしく容をあらため、咳ばらひして、

「これは御當家の御一代先の大殿の御筆にて、其大殿は御繪を好みたまひ、歌川國貞の門人となりたまひて、中々の御名人、ある日徳川將軍家より櫻蔭の天女の繪を御のぞみ、もだし難く、書かせられたる此繪姿、其時は大殿の御心にはつかざりしならんか、やがての姫君則此所に入らせらる、姫君の母公とあり玉ひし姫君をれ手本として書かせられたるが、此繪姿寸分違はぬ奥様のお姿、それより世は二と世をかり過ぎける内思ひのけぬは奥様の事、將軍家にも氣の毒がらせ玉ひて、思ひもかけぬ此度の事、これは汝が妻の姿繪も同樣、かつは父が物せし筆のあと忘れぬために遣はすなりとの難有き將軍の仰と受け、それより月々御命日には御床に掛けて、さゝげ物、これも浮世のならひにや」と涙隱して苦笑ぬ。　文彌は「へゝい」とばかり、姫の顔見るばかり、姫は今の咄しに涙さしぐみ、振袖のたもとを手遊にしたまふが愛らしくも又あはれなり。　折から此家の主人ゆるぎ出で、

「今日は天氣もよし、庭の花も盛りぢや。　酒もりは丁度よい、用意の盃もッてこい。」

「えいえい」と女中此所へ持ち運ぶ山海の珍味、殿は機嫌よく、内海にさす、

「へい有難う」

とさしつめ、引き受け、歡を盡して殿は此座にたまりかね、奥殿深く入りたまゐぬ。　龜右衛門跡打ながめ、業平めかして、

　あかなくにまだきも月のかくるゝか
　　山のはにげて入らずもあらなん

これを聞いて姫は硯引よせ有あふ紙へ、

　世に生るかひこそなけれ山のはに
　　月も入りてか陰の見えねば

乳母は此歌を見て伏しえづみければ、姫は、

「乳母はなぜ泣くよ。　早く芝居でする樣な反魂香を焚いておくれなよウ……」

御母樣が可愛いとの御聲が聞きたい〱とむづかりたまふあはれさに、一同は御道理樣とばかりにて、見るは床の間のかけ物、櫻蔭の天女の圖、涙の雨や香るらん。

以上　三章第二等賞

朧（十）　藤元なを（ヒサカ）

朧ろに匂ふ春宵の月は深く八重櫻の園を籠めて、夕ばへの眺めは更に一段の床しさを添へ、こゝ木の下を縫ふ苔の上には幾千優しい花の影の狼藉！

月も夜ふけて、花影はます〱あざやかに見え、軟風匂ひと吹いて、こぼるゝ露は雨の如く、今は薄絹の衣もしどけなう亂れて、水晶の肌は濕ふて、色更に澤々！

　行きくれて木の下蔭を宿とせば
　　花や今宵のあるじならまし

塵多い下界の春に浮かされて、端なくも行き暮れた此身、今こそ天つみ空に歸る由あれし。　あゝ花の主人、月の君――一刻千金の春靜かに今夜の夢を護れ！

右第二等賞

兄（り）　鶯遊　女史（ケイト）

「兄さん、天人ッて有るもんかねェ？　此間姉さんと博覧會へ往ッたら、櫻に天人と書いて有ッたよ。」

「あゝあるとも。」

「だッてまだ坊も見た事はないわ。」

「ない筈さ、坊はとても見ることは出來ないもの。　けれども兄さんはいつでも見てゐらア。」

少しせき込んで、

「ん？　見たことがある？　どゞ何處に？」

「いゝよ、坊なぞは勉強しないから見られないのさうら。」

「本當かい？　兄さん、そんなら革鞄を持ッて來るから、きッと見せるかへ？」

「坊の勉強でいつでも革鞄の勉強だからだ先だ。」

「なあにきッと讀んで見せる。兄さん、きッと見せるんだよ。」

「いゝかへ。　きッと！」

「まア、夏蠅なア。　早く讀め〱。」

「だッて讀んでから虚言なんて言ふと損だもの。」
「しつこい奴だ。きッと〳〵。」
「よし〳〵、え、第一章凡そ學問は勉強に在り、勉強とは……兄さんどういふ處に天人は居るかねエ。」
「また……讀まないか〳〵〳〵、其本を一冊讀んでしまッてから。」
稚心に珍らしいものを見られると聞いて、一心不亂に——常には鞭を當てゝも讀まぬしぶとい根性が瞬くひまに——然しこれがまだ罪のない處でぞ。
「さア兄さん、讀んで仕舞ッたよ。早く見せておくれ。」
「大變早かッたねエ。拔かしやアしなかッたか?」
「いゝえー さア何でもいゝから早く。」
「そんなら詮方が無い。庭へ下りて、座敷へ廻ッて來い。」
「よしきた。」
漸うよして今こそ本望ー 急いで廻ッて來た座敷口、兄は何處へ行きしか見えねど聲を限りよ、
「兄さアん……兄さアん……」
呼べど答へねば、一種異様の音聲が咽喉から發するやうにありました。兄は小高い爛熳と咲亂れた櫻の花の中から下へ顔を出して、呼びました。
「坊ー こゝだ〳〵。」
漸うよこ〳〵して奔ッて來て、

「兄さん天人て何處?」
「此處だ〳〵。」
「どこに?」
「此巳れが天人。だ是れ坊、忘れるなー 天人は一体人間では見られる者ではない。それは形ちが無いからだ。お前も博覽會で見た樣な美しいものだ。一体あれは見えないものをある樣に人間がかいて見せたれだ。併し人間があゝいふ姿になれぬかといへば、さうでない。兄さんの樣に勉強していゝ事さへそれば、天人と生れる事も出來る。ぶから坊も眞實の天人になりたい、見たいと思ふなら、勉強をして、悪戯としてはいけないよ。いゝかー」
兄の慈愛の一言、弟は左までとも思ひません。
「それでも兄さんは見さッて言ふぢやないか。」
「さアそまで。巳れも平常さういふ道理を知ッて居るから、見る者が何でも天人だ。どうだ解ッたか? 坊ー」
小聲にて、
「なんだつまらない。欺された。本を讀ひんでこなかッたッけ。」

右審査以外

愛の板ばさみ

發端の續

小林東天紅

それとは無しに母親に尋ねました―勿論父親の外出の跡で……

………

お母さん昨宵お父さんと何話して居るの？

よもや知りはしまいと思つても、的中と云ふ形に、母親はギヨトしまする。

何にも話しはしないよ、良く御前に勉強して貰ひたいと言つたばかりさ。

さう？　勉強して早く月給取りにでも成る樣にとのね？

母親は余程安心して

あア左樣。

あたしも、さう思つてるけれど、まだ小供だから人が使つて呉れないうちね、御父さんや御母さんに心配を掛るの！

心配なんぞしやしないよ、たゞ本途に御前の出精するのを喜んでるのさ。

其れでも昨宵あんな事を云つて居たぢやないか？

如何んな事を？　おや！　と態とながらも知らぬ風

切り出して見たものゝ、如何な事と眞向より問ひかけられては言ひにくい。　さし詰め口に出るのは

あのね……あのね……あのね、御母親さん………

親子ながらも言ふに言へぬ事とて、「あのね」の繰返へしを數重ねて、もぢ〳〵する苦しさは！　下手な筆には書かぬが増しです。

あのね　と亦一聲、常と變つて鼻の詰ッたかと疑ふ程、間も無く、さても堪へ切れなくなッた事か？　熱涙一滴。

あはや隠さうとする氣も無く只俯向いたばかり。

お前如何したの？　やさしく母親が、

今ハ何とて忍べる事？　次第に高くすゝり上げると、涙ハ手を傳はつて袖に流れ込ます、

母親も今ハあはれの貰ひ涙を出して、かすかに濕んだ雙の眼、慌てて前垂にて自分のを拭ひ、そして吾が子のをも拭ッて、ものやはらかに慰め始めました、

まア　お前如何するんだね？　何が悲しいの？　さア泣かないでお話しな。

言はうとしても何時も漸くあのねぎり、跡ハ咽喉に迫まる悲しさが容易くハ口を開かせませぬ、あッ、あッ、あッとばかり是れが關の山でした。

まア　如何したんだね？

母親ハさぞが心配。重ねて問ひました。

しばらく無言の間に、悲しさも　時と共に減ッてそろ〳〵と思ふ事が話せるまでに成りました。

お母さん、昨宵、あの家の事でお父さんとお話をして居たらう。

お前知つて居たの？　今は竊す事も出來ない譯となつて斯う言ひました。

あ、　彼方の室でね、それでね又たしは何故だか悲しく爲つたが、　あの話しは本當の事かね？

母親は困り切つて、誠は言ひ兼ねるしかし今と成つて詐りを言ふ事も出來ぬ場合、有の儘を言ひまして

あゝ　本當だよ。實はね、是れまでお前に知らせまいと思つて、夫れも何も竊す丈けでは無いんだけれど、小供にそんな事を知らせるのは良くない事だと思つたからね、其れではとお父さんとお話を仕て居たんだがね、本當に心配は心配なのさ、古昔とは違つて、今ではお父さんもあたしも一生懸命だけれど　如何も運が向かないで……しかしお前なんぞが心配をすると身体にも惡いし、勉強の邪魔にもなるから氣に懸けないで、夫れは眞逆其の日に困る樣な事は仕ない積りだから…………

何故わたしに知らせては惡いの？

親の身でこそ、子供の身にまで心配懸ける事、出來ぬ譯、何故かと云へば心配のあまりに勉強の妨害ともなり、または身体も惡くするやも知れぬと思ふのが第一。序いで吾子の樂しさうなのと悲しさうなとに　撰擇の眼を放ては　知らぬ人の相互でそら　笑顔で受けよい　まして起臥寢食をともにする親子は尚更の事、其れで如何あつても惡い事を聞かせたく無いと常の情、いづれ　其れを知れば不文の法律とも爲つて、萬方力を盡してかくも譯、其れが小供には其れと知れねば尤もの事喜愛共に受ける身のむしろ疑ふ、時三郎の此の問ひは其れの言ひ顯はし。

受けた母親の心は、ま、何如でしやう！　樂しませ、喜ばせるのが親として子に爲る義務其れが出來ぬのみか、困しや今は悲しみの種を吾子の心に蒔いた。蒔かれた方では共に荷を負ひたい素振、世間にて隨分親に苦を懸けても顧みないものは種が切れぬ程さに、さても中々いとしい吾が子、いとしい丈けに不敏が催しました。

いとしい丈けに不敏！　假令敎へと背くまでも吾が子にて親が慈しみを垂れる、其れが私と云へば心配を子に分けて云はゞ親としては如何な次弟何と答へて良い事か？

恐いと云ふ事で無いが　其れまでは親として濟まない、吾子に心配をさせて其れまで親の面で居られた事では無いでもないか！　御前に聞かれたから余儀無いて話すんだからね、氣に止めないで御呉んなさい。

鼻一すゝり、慌てゝ鼻紙揉んで俯向ひて暫時、

近所の子供衆の嬉しく遊んで居るのを見ても　御前は如何程悲しいか　口惜しいか　と思ふとふる〳〵泣きたくもなるが　仕合せにて　御前が能く別かつて　いやな顔をしないし極素直で御出でだから、氣の毒とてつく〴〵思ふけれど　余

程嬉しいよ。

またも時三郎の目を、露はくもらせました。

さては此身を其れ程までに！　あゝ　有難い事と感じ果てゝ見れバ、此身は親の言葉に從はぬ事も數有つたに、今更其れが口惜しい樣、

其處で悲しさが目に水を持たせました

白紙を染める一点の色は、たとひ小さくとも目に就きやすく、つまり占める力は大きいものでよし、世間尋常の此母子の間柄、少しも變はつて言ふ程の事は無いながらも、純白無心の時三郎に初めて植ゑた此れ種、少しは、身を立てるに就て助力をしましたらう。

二人とも須臾無言、ところに父親が歸つて來て　此の話を聞いて、三人が三人喜びと悲みに泣きました。

○　○　◎　◎　○　○　◎　◎　◎

此の話しの後は、兩親の樣子五六年前に變つた事、著しく時三郎の目に就いて、小供ながらも原因を探くれバ、思ひ合はされるは家の不如意の結局。悲しさが一段增しました。

其れが種となつて、親れ心中に想像の力が知らず〳〵立ち入れば、哀れ！　是れも悲しさと口惜しさに、其身が身で無れ風。以前の喜びの色は變つて憂としめし、笑ひの顔附は若さを放つて、古昔を羨む風も見える、世と喞つ言葉も時に耳に就く。其心の切なさは如何程であらうか？　其れを此身に慈しみ深い、少しも變はつたところが無いばかりか、むしろ度を增して、勿体なきは、苦と知らせぬ爲めとて、數多い心配。此間の爪も癇癪、紛れに破るでは無かつたに……早や悲しさが目に新泉を湧かせる仕儀。此樣な事は度でした

運動は不平均から生ずるもの。山本の家日を送る点から云ふも　其の以前と今とは不平均。夫婦の心もまた夫れ、時三郎の心の運動が珍らしく起つたのも其れゆゑです、がさて自分の身の回り、遊び道具にしろ、食物にしろ、其れも是れも變つて、云はゞ不自由と爲つた、夫れが此れ男の心に親を望む念を起させず濟んだは不思議な樣。しかし其れには所謂無くも有りません。

其れかと見れバ、成る程以前と異はりて不自由に成つた。併し親の慈愛は尚も增した此頃、時三郎却て親の不幸を氣づかひ、思ひやり、悲しむまでに立至つたは其れゆゑ。元と慈愛は金錢にて買へるものでも無し、從而家は貧くても慈愛の出來ぬ理も無き譯。山本夫婦も一方には子に不自由させるの余儀無く爲つたと共に樂に慣れた、身を憮不敏と、片手に慈しみ、可愛がり、僅の間に、子にまで其誠情が通ずる程に成つたのです。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

葉さくら

（上）

小星史女

乳母やア、爲やうの無いよ輝ちやんは、足を搖つてばかり居て靴を履かせることなんか出來やアしないよ。意地惡め！」と言つて阿榮とゐ娘は眞赤になつた顏を振上げて、上り端へつッ立ッたまゝ、つく〲妹の顏を凝視めました。「輝ちやん、何にも爲ないんだよ。」と言ッたのは今歳やう〲三歳の阿孃さま——家內中での可愛がられもの、阿輝が甘えた言葉でした。「輝ちやん、何にも爲ないんだ。姉ちやん、うゥ、惡るいんだ。輝ちやん、靴履うちて吳んないんだよ。」

心の底から憎く思ッたのでは有りますまいが、その口前は流石に鳥渡姉の氣に障らなくも有りませんでした。氣に障つたからとて餘りな！血を分けた實の妹をあら〲しい搖振樣！

「馬鹿！『姉ちやん、惡りいんだ』なんて！もう遲れてッてなんか遣るもんか。」

折角の蒼空もあの一言でにはかに曇ッて、今にも大暴雨が美しい花園を洗ひ流さうとして、まだそれに伴なふ大風が吹いて來ぬ爲め、何とも言ひやうの無い空合と見せて居ました。此時中裁に入ッて乳母は阿輝に取ッての大風で、來ると直ぐ、待兼ねたと云はぬばかりに！大雷雨と起しました。おそろしい此物音でこの折生憎お腹の工合が惡くてやう〲今眠就いたばかりの嬰兒が眼を覺まして泣出す騷ぎ。それやあれやで乳母はわれ知らず阿榮をたしなめました。——

「阿孃さまッ、貴孃はまア何です？　姉さんぢや有りませんか？」

言ふこととなか〲この位で默りはせぬ。けれど、場合が思ふ存分を言ふことは容しませんでした。嬰兒も泣けば阿輝も泣く。『雙方一齊に泣きたてられたので、それを靜める乳母の心急しさ！並大抵のことでは有りませんでした。

まさかお斯うならうとは夢にも知らなんだ阿榮も、流石に後悔の念は、浮ぶ。浮んでもまだ奥へ行ッて詫する程の勇氣は得出せず、つくねんとして居た折、此騷ぎに驚いて母親の出て來たのは得がたい機會、直ぐお言譯でもするかと思へば案外！急に啞になつたかの樣でした。

母親も左程阿榮の方へは注意を向けず、いや一向お頓着無く、嬰兒にのみ氣をうばゝれて居ました。そを故ながら嬰兒を抱き上げた時は母親の顏色の凄じさ！

阿榮は極りが惡くなつてズル〲お室を脱け出して、客間へ驅込んで直ぐ身を投げ出しました。身を投げ出して後一時、阿榮の眼から湧き出した淚は、たゞ阿榮の眼を濕はしたのみでは無く、阿榮の骨身をも擧く勢ひでした。

遠藤榮とゐふのは芳紀十二の少女。が、齡に似合はぬ活潑であつたゞけ隨分隣近所のものから可愛がられた評判娘でした。珠玉には得て微瑕の有りやすいもの。阿榮もやはりそれでした。性急な質ですべて、物事に堪忍といふことの出來ないのが阿榮の微瑕。たとひ瑕は小さくても打ちすてゝは置かれぬもの。其處に氣が注いて母親も或日阿榮を一室へ呼び寄せてだん〲優しい說諭を加へました。もと〲愚鈍で無い阿榮のこと、見事その身を圍繞ッて居る罪を追拂ひました。それも今からわづか二三週間前のこと！

間もなく騷ぎも止んで靜寂になつたので、そろ〲坐敷の方へ足を忍ばせて行ッて障子の隙から內の樣子を窺れば、嬰兒は母親の膝の上へスヤ〲眠ッて居るばかり、乳母と阿輝は庭へ散歩にでも出たのか影らしいものも見えませんでした。今度といふ今度は阿榮も決心して座敷の障子を開けて直ぐ母親の傍へ坐ッて偃伏いたしました、

「阿母さん、何うしたら宜いでしやう？　わたいの爲ることは一つも善いことは有りません。輝ちやんだッてはぢめる氣ぢやア無かッたんですけれど……ほんとに何うしたら宜いでしやうね。」

母は優しく片手で阿榮の脊中を擦でゝ、さて言ひました。

「お前もうそんなにお泣でないよ、見ッとも無いから。まア淚をお拭き。」

と言ッて自分の袂の中から手拭を出して遣りました。

「お前、今朝神さまを拜んだかえ？」

「……」

「それ御覽、だから宜けないよ。學校の先生なんざアそれやアいろ〲の事と言ふさ。けれど、朝早く神さまと拜んで、それから御飯を食るッて何を爲るッて爲なけれやア神さまは罰を當てますよ。」

「そんなら、阿母さん、わたいも罰を當てられたんでしやう？　今朝は遲くなつたからお御飯をいたゞいてから拜まうと思つて居たら、乳母やアが私を呼んでね輝ちやんの靴を履せて遣ッて下さいッてェもんだから……」

「朝御祈禱を爲なかつた日は神さまの罰で其日一日中善いことは無いから、明日からは必ッと忘れずに毎朝拜むんですよ。宜かえ、神さまを拜むことを忘れては成りませんよ。」

「はい。」と言ッて母を見上げた時ハいかにも嬉しさうな顔色でした。「これからハきッと忘れハ致しません。」

此時阿輝ハ丁度散歩の歸路で、母と姉が坐つて居た座敷の庭先へ誇顔に咲いて居た椿の花を見て驅け出しながら、

「輝ちやん、美い花、めつくいたよゥ。」

乳母も跡から續いて追付きました。

「阿輝さま、これ取つて上げましやうか？」

「うん。」

乳母ハ早速一輪の花を折つて遣りました。

阿輝ハ喜んでそれを受取りながら、

「もう一ちよ。」

「そんなに取ると阿母さまに叱かられます。」

と口の先までハ出たものゝ、今こゝで氣嫌を損じてハ百日の説法も何とやら。急に氣を換へて、また一輪折つて渡しました。阿輝はにこにこ笑ひながら今折ッて呉れた花を右の手で受けて先に折つて呉れたのを一途に左の手へ持ち換へて、

「もう一ちよ。」

あまりの事に乳母は處據なく惡まれ口を叩きました。

「阿母さまに叱かられますから、また明日に爲ましやう。ねェ、阿輝さまやはお聴き分けの善い事！」

「うゝん、阿母ちやん、あの、叱かりやア爲ないよゥ。」

言つて左の手に握つて居た二輪の椿花を両手に持つて、そして左の手に持つたのを動かしながら、

「此花、輝ちやんの。」

右の手を動かして、

「これ、母ちやんの。まだ姉ちやんれ無いよゥ。」

「あゝ！阿輝と——流石に子供です——姉の不深切を最早忘れて終ひました。乳母は一人感心してまゝ一輪を折りました。阿輝と嬉しさうに三輪の花を持つて、急いで椽側を驅け上つて、姉の傍へすり倚りました。

「姉ちやん、此花進げまちよ。」

「あんがとよ。輝ちやん善い娘だから其方のをもう一つお呉んな。」

「うゝん、これ、母ちやんと輝ちやんだよ。」

阿榮の傍を退いて、母親の肩へ花を持つた方の手を載せて、片手で庭の方へ指さしを爲ながら、

「姉ちやん、もう一つ欲きやア、彼處澤山あるよゥ。」

「さうですね、姉ちやん彼様こと仰いますから毆ッて遣りましやう。」

乳母は片手を阿榮の脊中の方に置いて、そして右の手で二ッ三ッ續け樣に拍つ。阿榮も乳母の心を受續いで乳母の手を拍つ度に『ないゝ、わいた』と相槌を入れました。阿輝と實際姉が擲たれて眞個に苦痛を受けると思ッてか、さも氣の毒さうな顔付。

「乳母やア、姉ちやん柔順だから毆りんぢや無いよゥ。」幼主人に毆てと言はれたとて何うまア主人を毆たれましやう。氣嫌を取る爲めの似而非刑罰、それが爲め反つて氣嫌に障ッてハ乳母の本心に背くこと。乳母ハ有りッたけの智惠をふるッて自分の役目に背かぬだけに、体よく其場を何うか斯うか娛磨化して一座の笑となりました。

（中）

天氣の好い四月の朝——丁度朝飯を終ッた頃、阿榮の母に宛てた電信が屆きました。文言ハ姉が急病で危篤だから呼息のある中に是非もう一度逢ひたいとのこと。外事でも無いたッた一人の姉の病氣、出來ることなら鳥の翅を借りたい位。直ぐ出立の用意に取掛りました。就てハ嬰見ハ小さくて仕方が無いにしろ、阿輝姉妹ハ兎に角家に遣ッて乳母の保護を受けることゝ爲ました。

とこづうの間ながら父母に袂別れるかと思へバ、阿榮も心地の好いことハ無論無い筈。が、荷造りも出來、人力車も來て見れバ、もう何と言ッても甲斐無いことでしよ。けれど、未練ハ制しきれず、遂に斯う言ひました。

「なる丈早く歸ッて…………ねェ、阿母さん。阿母さんが居ないとわたい等ハ寂貧いから。」

「あいよ、姉さんさへ少し快くなれバ直ぐ歸ッてハ來るけれど、私の留守中に輝と喧嘩なんぞ爲るんぢやア有りませんよ。宜いかい、お前の方で余程勘忍して遣るやうに爲るんでそよ。」

「はい。」と言ッた答ハ耳にも止めず、母親ハくれ〲乳母に向ッて、二人の子供のあとを頼んで、夫婦別々に車に乗つて出た跡、阿榮ハ飄然座敷へ立戻りました。

今日ハ取分け混雑した爲め——例と違ッて——誰も起しに行くものが無かッたところ、阿輝ハ眼を覺まして泣きもせず、不思議さうに天井板の節穴を見て居ました。此体を見て阿榮も急に御世辭ものになつて、しかも其聲も優しく『輝ちやん、柔順だね。』

阿輝が食事終るのを待ッて、阿榮は例の通り乳母と三人連れ立ッて庭へ散歩に出て、先づ築山の小さな亭で鳥渡休みました。

「わたいは今日學校へ行かなくても宜いッて先刻阿母さん

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

か言ッたから今日も行かないよ。其替り午後から唱歌の復習を爲やう。ねェ、乳母やア、宜いだらう。仙臺の伯母さんが快くなると去年の博覽會の時見たやうに、また家へ來るから其時あたいは歌ッて見せやう。あの伯母さんは大層唱歌が好だッてッさいッけだからわたい學校で習ッたのよりも、もッと面白いのを二ッ三ッ覺えて置かう。ね、乳母やア。」

乳母も感心の心掛けと思ッての挨拶、その挨拶の腰を折つて阿輝が、

「乳母やア、輝ちやんも爲るんだよ。」

「さう皆さんがおとなに爲さると、阿母さまの御歸りには御褒美澤山で持ち切れませんでしやうよ。其時には乳母やアにも一つ。ねェ、阿孃さま。」

「うん、乳母やアにも澤山やるよ。」

此會話最中、阿榮は袂から毬を出して、其處から三間ばかり先の小さな檜の枝の低いところへ毬ごと掛けて、

「輝ちやん、さア競走を爲やう速く行ッて彼の毬を取つたものには御褒美を上げるんだよ。殊によると姉さんが負けるかも知れないよ。」

此競走は大當でした。見て居た乳母でさへ何と無く嬉しい樣な氣が爲た位。自分が速くて勝ッたと思ッて居た阿輝には何んなに嬉しかッたらう！

彼れ是れして居る中に晝飯、それから晩飯、終に床に就く頃になつても思ひの外に！悲哀の分子は立入りもせぬ、二人とも心地快く枕と並べて眠に就きました。

次の日は阿榮も例の通りに學校へ行きました。行ッて見ればそれ相應な課業の爲めに反つて一日が短かゝつたやうな氣も爲ました。

家へ歸ッて見ると喜ばしい報知が屆いて居ました。伯母もまだ全快とは行かぬながら、何にしても危篤やうなことは最早あるまいとの母の手紙。しかも次のやうな優さしい言葉で終と結んで有りました。

「…………言はぬともの事ながら成るべく自分は過失に打ち勝つことを務めまた父母の財寶となることを勵み、決して輝と勞はることを忘れず、乳母の言ふことは母の言葉と思ふて聽くがよし。母も近き中に歸る心なれば必らずしもあらず心配するも用なきまゝと！」

阿榮は此手紙を大切に保存ッて置きました。たゞし一度は學校へ持ッて行ッて入江靜といふ朋輩に見せて、そゞろに亡き母を思はせたのは例外。

遠藤夫婦が出立してから丁度四日目、阿榮が晝飯に家へ歸ッた折阿輝は何でも一途に學校へ行くと言ひ張ッて、なか〳〵承知しませんでした。

「輝ちやん、病氣もう快いよ。だから學校行くんだよゥ。」

どちらかと言ふと阿榮は阿輝の懇望を叶へやうと思ひました。で、乳母の容子と見ましたが別に不承知ざと言ふやうな風情も見せはせぬ、西洋人には賞められさうな阿輝の初毛を小さな帽子で覆ッて呉れました。が、不安心との心は幾分か無くも無い。その心が次の注意と吐きました。

「あの阿孃さま、お歸路には何處へもおいで爲さら無いで直ぐ歸ッて入らッしやいよ。例とは違ッて阿輝さまは御風邪氣で、今朝なんぞも大層に苦しいやうな御咳を爲されまし位ですから……あまり久しく外をお歩行遊ばしてあや〳〵お不快くお成り遊ばしますと宜りませんから……」

「わいよ、」

言ひ捨てゝお輝の手を捉ッて跡をも見ず……乳母は無言でさも氣遣はしさうな顏付で、二人の出て行く後姿を見送ッて、しばらく佇んで居ましたが、やがて獨言。

「あゝ、わるい事を爲た。何う彼仰つても何とかお賺し申して、おいで爲さらんやうにお勸め申せば善かッたのよ。」

高木女學校と言ふのは本鄕元町の私立女學校、即ちこれが阿榮の通ふ學校です。今日は妹を連れて來たので朋輩もおかチヤ〳〵言はれ、連れられて來た妹も大層喜んで居ましたしかし、その皮相の喜び位でなか〳〵病相は裹み得ませんでした、お輝の顏色美くないのを流石に教師見拔きました。

「遠藤さん、貴孃のお妹子はお顏色が大層お惡いから、早く連れてッて、寢せてお遣りなさい。」

今日に限ッて歸路に入江の家へ行く約束を爲たのに、それも思ふやうに成らぬことゝか阿榮の腹中では不平を鳴らしました。と、言ッて教師の言葉には背かれぬ、いや〳〵ながら入江にも斷りを言ひました。

「入江さん、御免なさいよ。あたい輝ちやんを連れて歸るんだから、貴孃の處へも行かないから。」

しぶ〳〵學校を出て、毎日通ひなれた銀杏の樹の通へ曲らうとした折、馬の足音とも聞違へさうな木履の音と同時に駈けて來たのも御氣お入りの入江といふ娘でした。

「ちよんと〳〵遠藤さん、お待ちなさいな、あたいもお暇をいたゞいて來たから、あたいの家へいらッしやいな。」

學校の門を出てまだ半町も歩かぬところ、流石お教師の言葉はまだ耳に殘つて居る。お榮は子供ながら直ぐおいそれとは言ひ兼ねて果敢〳〵しい答も出來ませんでした。此方は自

分の家へ行かれないと育くれるのが殘り惜いもかりか、わざ〳〵お腹が痛いと僞りて學校の暇と取つて來る位の決心。答が無いでハ濟まされぬ、阿輝と說伏せるのが第一ハ策とあつばれな妙案を起しました。

「輝ちやん、わたいの家へおいで爲さいな。行ッたッても宜いでしやう。否?」

招られゝば善い惡いの區別も無く迷はされ容いのは子供の常、阿輝もおなじく其方でした。

「行かうよゥ、姉ちやん、行かうよゥ。」

阿榮ハやはり答へません。阿輝ハまそ〳〵言ひ張る、阿榮ハ五月蠅くなつて、前後の考も無く『わたい知らないよ』と言ひ放つ途端、危く泣き出しさうになッたのを『行きましやうね』と言ッて阿靜が受止えたので、先づ大擾も無いで事ハ濟みました。濟んだ結果ハいよ〳〵阿靜の家へ行くことゝなりました。

(下)

阿靜の家ハ東竹町の河岸端、阿榮のハ元町の二丁目。今假に一方の家から學校を通過して他の一方の家まで線を引くとしたなら、恐らく一直線になりさう。即ち言ひ換へればバ學校から正反對の位置に有るのです。それで何方かといふと、阿靜の家へ行く方が遙かに遠道でした。で、無くとも足弱といふ弱味の有る阿輝、何うまア疲れずに居られましやう?阿靜の家へ上ると直ぐ足を投げ出したまゝ姉の躰へ身を倚り掛けました。阿榮はそれも能くも知らず、阿靜と自分勝手な談話に氣を取られて居ました。

不圖氣が注いて見れば阿輝は睡つて居る、しかも顏色は眞蒼、一目見て阿榮も愕然。

「入江さん、何うしたんでしやうね、輝ちやんは眞蒼な顏をして居てよ。」

「わたいは必ッと何處か鹽梅が惡いんだと思ぬわ。だから早くお家へ連きてッてお遣ンなさいよ。」

お榮ハ妹の腕を取つて徐かに搖り起しました。

「輝ちやん、輝ちやん、おッきお爲よ。さアお家へ歸るんだから起ッきお爲よ。」

夢を破られてお輝ハ泣き出しました。

「乳母やアよゥ、乳母やアよゥ。」

さま〴〵に言ひ含めて家へ歸らうと爲てお榮ハ彼れ是と骨を折つてハ見たものゝ何うしも聽入れる景色も見せませんでした。

「嫌よゥ、いやよゥ、足痛いゝから嫌よゥ。」

ろの時、表を通ッた子守女を見て思付いたお靜の助言。

「遠藤さん、貴孃背負ッてッて御遣ンなさいな。輝ちやんハ迚も歩けないでしやうから。」

「そんなら輝ちやん、背負してッて遣るからおいで。」

まんざらでも無かッたか、振向けた背中へ近よッて兩手をひとつ〳〵兩方の肩へ載せました。お榮もまア大膽な!重荷を背負ッて立ちました。

「入江さん、やかましくして御免なさいよ。此樣なら、わたい初めッから一途に來なきやア宜かッたと思ふわ。左樣なら。」

「左樣なら。また入らッしやいな。」

「えェ、また來てよ。今度ハ一人で來てよ。」

此處を出てから先刻お靜に呼び留められた角まではハ感心にも身不相應な重荷を背負ッて來ました。が、もと〳〵分に過ぎた仕事也ゑ任に耐へられないハ定。終にお輝を下ろして、さて言ひました。

「姉さんは手が疲れてもう背負て出來ないから、歩行とお爲。」

輝ちやんは不服、頭を振つて泣き出しました。お榮もこれまでは成るべく氣嫌を損じ無いやうにいろ〳〵注意は爲て見ましたが、其甲斐は少も見えず、ます〳〵大聲に泣き立てるれみもゑ、今まで抑へて居たお榮の肝癪も一時に湧え出しました。

「畜生!大馬鹿!」言ひさまお輝の肩に載せて有つた――今といふ今まで宥める爲めに盡力した其同じ手でお輝の肩を搖振ッて、「なんよ爲ないッてェことが有るもんか。」

恐ろしさに却ッて大聲の腰を折られて啜泣をして居たお輝の手を取ッて、否應なしに引ずッて行かうとした折、れ輝の泣聲を聞き附けて乳母が來ました。

「お榮さまッ、貴孃はまア、何處へおいで爲さッたのです?あれやと乳母やアが申上げたでは有りませんか?」お輝の方から直ぐ駈け寄りました。今までの淚の顏も其儘で。乳母が抱き上げやうとして手と出すのも待さず、

「おゝ〳〵お可愛さうに!何うなさいました?まアお可愛さうに。」

無理ならぬ乳母の叱言ながら、三尺と離れぬ目の前でホチヤ〳〵言はれるものゝ有るのと見て起ッた僻を根情でか、たゞしはむしやくしやの腹立まぎれでか、お榮の目ぶまとはさも投げ附けたやうでした。

「何處へ行ッたッて宜いやい、馬鹿!これからもう輝のやうな面倒な奴なんかゞ……誰が連れてッて遣るもんか。」

お榮の惡口と聽ながしに立つた乳母。其乳母の興へた菓子をお輝も皆まで喰れぬ中、睡魔の爲めに冒されて、ズット乳母の胸へ倚かゝッて來ました。其儘乳母も氣を利かせて｜｜押入の前まで行ッて、蒲團を出して其上へしづかに寢せました。寢せは寢せたもの、よく／＼其寢入つて樣子を見れば何うも快くないやう。不幸にも素人極めの鑑定が的ッて、いよ／＼流行性感冒になつたことかと乳母の心配は並大体れことでは有りませんでした。それにつれて大人は大人だけに幾らか氣の注いたところも有りました。即ち例ならお榮と一途に寢せるのを、今日ばかりは其習慣を破ッて、お榮の寢床とは全く別に設々ました。

いかにも病氣の鑑定は爲たものゝ、其鑑定の足らなかつた爲め、乳母の慾目か大したことは無いと斷定して其結果は醫者の處へ人を驅け附けさせも爲ませんでした。後から思へばこれが不吉の源因でした。

夜明少し前時分、阿輝は眼を覺して、躰が火でゞも燒かれるかのやうな搔ぎに、乳母は直樣醫者のところへ人を遣りました。その使が歸ると直ぐ跡から醫者も來て、だん／＼診察をした末、

「流行性感冒では有りませんから餘程大切に爲なくては……

……」

偖だと今が今まで信じて居た自分の鑑定は美事この一言の爲めに破られて、乳母は思はず後じさりして駭きました。

「流行性感冒では有りませんでしやうかね？」

流行性感冒がそれ程よくて阿輝の病氣をそれと極めたのるかと思へば、醫者は可笑さと耐へて、

「流行性感冒では無いが、何にしても今ではまだ輕い方だから左程心配なことも無からうが、看病を怠ッてはいけません。」

阿榮も此搔ぎには眼を覺まして居たが、醫者が來た爲め急な心配な事が湧き出したと言はねばかりに、阿輝の顏を覗いて居ました。醫者も始めの内は氣にも留めませんでしたが、阿榮は此樣子を見て、

「阿孃さま、貴孃は此處においで爲さッては好く有りませんから、お次へでもお出になつて御休寢なさいまし。そして晝の間でも成るべく御病人の傍へはお寄なさいませんやうに爲さらんでは宜けません。」

阿榮は一言の返辭も無くしは／＼寢道具を次の間へ運んで、夜具を引破ッては見ましたが妹の病を心配するあまり、いろ／＼な空想を起して、なか／＼止度も無くなりました。その中に何うか斯うか夜は明けたが、併んだ耳で聽くせいか鳥の空聲も不吉に聞える。耳についてきらぬ儘、生れてから今日ばかりは鳥と一途に床を離きく、何でとも無く玄關まで來て見れば、丁度下女が掃除をして居たところでした。

「常や！　輝ちやはん快いの？」

「はい。」と言ッた時には下女の兩眼は濕り、聲もまた潤みました。「お……お可愛さうで厶います。『どうも快くない』ッてお醫者さまも仰しやいましたし、それに阿輝さまも始終『阿母さま、阿母さま』と仰しやるものですから……」

と、聽いて阿榮は泣き伏す。下女も跡を言ひ續け得ず、これも同じく。暫らくの間も四ツの袖がたゞ震へて居るばかりでした。が、下女は年だけに泣き止んで、阿榮を慰めましゝ。

「お泣き遊ばしますな、れ……阿孃さま。二三日の中にはまた舊のとほり御壯健におなり遊ばしましやう、からもう／＼お泣き……遊ばしますな。」

「わたしが惡かつたのだよ、昨夜外と連れて歩いてためだから。其樣ことも有るまいが、もし輝ちやんが死んだら、常！　わたいは……私は……」

嘘も時に取つての方便、下女のお常も其方便を用ひました。

「ですがね、阿孃さま、お醫者さまの仰しやるのを妾も聽きましたが、熱はそう久しくも有るまいッて言ひますから、今に快くお成り遊ばすで厶いましやう。昨日お出なすつたのが障つたなんて、貴孃、そんなことが有るもんですか。」

阿榮の答を代表するのはたゞ胸も引裂けるほどの啜泣ばかり。下女は骨折が役に立つたとは思はれませんでした。其中に下女は乳母に呼ばれて立去て、殘るは只一人。

偃伏したまゝで、さうでした十分も經つた比でしたらう、阿榮は何と思ッたかズット身を起して｜｜珍らしく｜｜神棚の前へ禮拜しました。思ふに日頃の母の教誨が幾らか耳の底に殘つて居た結果で、願の意は言ふまでも無く、妹が病氣平癒にわつたのでしやう。此時の阿榮の心中を想像すれば極端の言葉かも知れませんが、此もし妹が死んだなら其身の罪過を責めて、其結果は自分も死んで終ひたい、即ちこれでした。

この恐ろしい日が一秒／＼と終へて行くに從ッて、阿輝の病氣はます／＼快く無く、『阿母さま』といふ哀れな聲もまた次弟に其數を増して來ました。其聲は哀れさ！　誰に聞りしても兩眼に涙を浮べぬものは無いところ、まして肉身の姉の阿榮には……

思ひ迫ッて幾度と無く室の樣子を覗く、けれど、乳母は醫師の吩咐を護ッて、一度も踏を込ませませんでした。所據無

く立戻つて神棚の前で祈禱三昧！
　彼是して居る中に五時が鳴る、それから間も無く二輛の人力車が玄關へ着きました。下りて直ぐわはふ〻しく誰に向ッてふのは阿榮の母でした。轉げるゥのやうに人力車から下りとも無く、斯う言ひました。
「輝は何うざい、少しは快い方かい？」
　この問に應ぜるものは一人も有りませんでした。が一同の鬱いた顏色、それが充分に『快く有りません』といふ答の代育者となつて居ました。
　やがて夫婦は玄關を通ッて阿輝の寢て居る間へ行かうとして、阿榮の出て來るのに行遇ひました。娘は何か言ひ出さうとしたのを母が先づ口を開きました。
「榮！お前嬰兒を抱いてお呉れ。疲勞れたら常にお遣り。今日は乳母は見て遣る譯に行かないから。」
　阿榮は乳母の手から弟を抱取つて客間へ行きました。嬰兒の裝飾物などを見て居たのは一時、眼を轉して何氣無く姉の顏を覗いた時、阿榮の眼はまだ涙で濕ッて居ました。これが爲め嬰兒は感情は刺激されて、ワッと大聲を擧げて泣き出しました。

＊　＊　＊　＊　＊

　阿輝が病付いてから第五日目、即ち日曜日の午後のこと。空は薄昏くかき曇ッて、雨さへ少しづゝ降つて來ました。遠藤夫婦は今朝の醫師の言葉が耳に殘ッて居て氣が氣で有りませんでした。と、言ッて別に仕様も無く、たゞ兩人とも病人の傍に附いて居ました。
　弟が寢附いた爲め、お榮は暫しの猶預を與へました。其暇に自分も足を伸して休んで居ると、さア大變です。妹の病氣が傳染したのか？頭痛がする。咽喉が乾く。それで全身はぞく〳〵慄へて來ました。ジッと耐へて身動きもせぬ居たところ、やうやく身体も勞れ果てゝ、何時睡入ッたとも知らぬに目睡みました。
　誰か知らぬが障子を開けて除つと這入ッて來たというつゝの中にも能く譯りました。這入ると直ぐ自分は傍へ近倚ッて來て自分を搖り起したと思ふと夢は破れました。眼を擦へてよく〳〵見れば誰あらう？自分の母でした。
「お母さん、輝ちやんは……少しは快いの？」
　答は無くて擦り亦先た兩眼からさらに涙數行！
（をはり）

學者の遊戲

學者といふものは餘程世の普通と違ッた人間で、隨分奇妙なお說をも吐たり何かするのなどには身のまはり悉皆書籍の山、その中に楯籠ッて頗る奇妙の事として居て、そして大抵が始終その中へ食もたれの隱居を極めて居るであらうとは世の人が一般に考へる處です。が、實際はさうでも無いのです。
　如何にも學者の中には丸で仙人同様の人物も有りますが、一般から押しなべて言へばさう斗りでも無く、時には一事物の研究に取り掛ッた時は寢食も忘れる迄に爲る事も有りますが、さて學者とて神でも無ければ鬼でも無し、人間あたり前の情念も有るからには却ッて普通人が推想するより案外な事も有るのです。畢竟人間の身体とて左様困し先つゞけて堪るもので無し、よし耐へ得たにしろ、只それを耐へ得ただけで却ッて勞の方が功にまさるのでそ。學者は人並より腦を多くつかふ方。それだけ身体も衰弱する、それ補ひを自然お取るのは道理上當然の噺です。
　そびのざと言へば泰西で屈指の大哲學者でした。これで書齋に籠ッて千思万考學問を研究した後いよ〳〵身体が疲れたと爲ればそびのざは忽ち書物を拋ッて茶の間へ飛び込ミ、俗極まる妻子を相手にして極めて俗な、極先て普通な、極め

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

てつまらない断をし合ふのが常でした。　そして其断をする時の嬉しさうな事と言ッたら、又その断しはつまらぬ事と言ッたら、迚も大學者とは見えぬ方でした。

只是だけならまだ〳〵普通です。　殊にをかしいのはすぴのざの蜘蛛の喧嘩を見るのを好んだ事でした。　それも何も蜘蛛の喧嘩を見て、其性質をよく吟味し、何か一つ攻究しやう杯の念慮が有ッての事では無く、唯何と無く無茶苦茶に其喧嘩がすぴのざには面白かッたのです。　二疋の蜘蛛をその邊から捕へて來て、二疋衝き合はせていよ〳〵喧嘩を始めさせ、非常に興に入ッて見物し、或は先生自身に塵屑などを持ッて二疋の援兵を遣ッて見たり、終には凄まじい聲を立てゝ笑ひ出す事も度々でした。

希臘第一流の哲學者そくらてすはよく子供と一所に爲ッて遊んだとの趣きで、之に似たものは獨逸有名の宗教家めらんひとんでした。　ある時何心なくめらんひとんの友人が突然同人の居間へ入ッて見ると、是はいかに、めらんひとんは床の上を子供と一所に四ッ這ひに爲ッて這ッて歩いて遊んで居ました。　めらんひとんは親友まるちん　るうてるは人の知ッた有名の宗教改良家でしたが、其宗教改良の難事種々湧き出して殆んど思案にも暮れさうな中で、突然子供は群へ飛び込み、一所に爲ッて遊び狂ひ、或はまた森杯へ出て鳥などを茫然と見物する事も有りました。

星學者たいこ　ぶらへは學問を終ッて後目鏡をみがくのと何よりの樂しみとし、又詩人ありおすとは園藝の細工が好きで、いつも時と作らぬ時は鋤鍬を取り、その癖植物學の心得は一向無く、折々木の名を間違へて仕舞ひ、花が咲いて本人大に騒いだといふ奇談さへ有る人でした。　佛國小説家の泰斗ばるざッくはクレオンで描いた畫を蒐めるのと好み、獨の詩人しるれるは靜かな所を散歩したり、又しづかに水上に舟を浮べるのを好みました。　りせうらは大した政治家でしたが高飛の遊びが好き、さみゆえる　くらアくは名高い哲學者でしたが、是も甚だ高飛を好み、間に合はなくなると部屋の中の椅子や卓子をぜし〳〵飛び越しました。　ある時その部屋へ大層わるく澄ました男が遣ッて來たのを見るよりくらアくは笑ひ出し、「あゝ馬鹿が來た、もう廢さう」と言ッて止めたといふ程です。　ぺたひなすはドクマタ　テオロジカ（神學私見）といふ書を著はして名高い人でしたが、其著述に掛ッて机に向ッて居る處で、氣を拔くのだと言ッて度々椅子によッたまゝぐる〳〵身体をまはして居ました。

春の月(韻文)　撫箏女史(こゝ)

咲乱れたる花の雲
離れてこそれのぼれども
猶おぼろよて中々に
哀をハ深し春の夜のつき。

かゞみとや見む池の面、
今ハた白くよでりけり。
ふりさけ見きバ朧にも
澄みつゝ匂ふ春の夜の月。

霞の袖をぬけいでゝ
雲間にまよふうりごのねれ
聲さへ更けて有明の
影いと暗しはるの夜の月。

君は行く(韻文)　はつ子

はら、はら、はら、はら!
なみざのむらさめ、
たもとも朽つべき、
いのちも絶ゆべき、
なゝら　君は行く!

ひら、ひら、ひら、ひら!
みはたはひらめく、
心とくるへる
高なみけたてゝ
あゝら　君は行く!

るウまよお軍歌の内一節　美妙

ぶらむッと山　嵐　あろし。
　白き　は　きよき　こゝろ　なり。
嵐　よ　むかひて　うねく　の
　岨道づたひ　たゞ　一騎
駒　の　たて髪　やまかせ　に
　涙だゝせ　つゝ　うるせ　行く
みひゆ　の　そびた　ぞ　いさましき。
　白骨　くりて　笛　と　爲し、
馬上　もたの　よ　吹き　そるむ
　音　冴え　わたる　夜中すぎ、
へるず　の　闇　も　ますらと　ごの
　おめず　恐れず　進み　行く。
駒　の　鐵蹄　石　を　蹴て、
　飛ぶや　火花　の　きらり　きら!
闇　つんざいて　夏　さむし。
　落葉　音　無く　踏みしたき、
誰　か　む　跡　と　つけ　う　べき。
　進む　も　行く　も　只　一騎。
みひも　と　わごの　のる　駒　に　いふ。——
　いかに　汝　や　つかれ　たる?
山風　あらく、岩　たかき

山路のためか、さにあらじ。
　汝風にも乗り得べし。
厚板よろひくろがねの
　重さがためか、さにあらじ。
　汝鐵をもくだくべし。
轡くづれか、鞍ずれか、
　何を恐れて足れそき？

こゝへ顔なる駒のさま。――
山路はいまだ難からず。
　虚空と飛びてはしり得ん。
鐙もいまだおもからず。
　千斤も猶さゝへ得ん。
轡もいまだかたからず。
　巖も嚙みて碎き得ん。
鞍とていまだつらからず。
　背と鮫皮もこらへ得ん。
おそき故よしはかになり。
　五十八にはやゝ足らぬ
四十五八のならしをが
　咽喉を血しほに鳴らしつゝ
　君待ちつけて伏せばなり。

敵は名に負ふへいだくす、
　勇猛虎をひしぐべき
　健雄はうちの健雄なり。
胡桃の森の横のかた、
　花崗の石は岩かげに
酒盛しつゝ待つよしと
　峯に映りて金粉を
　散らすやかげに知られたり。
巨魁はせのし年たかし。
　毛にひそみたるうんばせや、
鬼髯むねに垂れさがり、
　惡蛇の眼、いかり肩、
腰に佩びたる大わざもの。
　玉ごめしたる銀の銃。
伴なふものとしとかの
　火にも飛び入る勇者にて
首筋ふとく、肉かたく、
　報酬を受けてたゝかいぞ。
打紐の元ゆひあざやかに、
　いたゞく兜天と衝く。
かゝるするどき猛者どもが
　君みとめなばいかならむ。
大難こゝに湧きいでぬ。
　君の御身は言ふもさら、
　この身も死地に落ちにけり。

豫告のとほり

本號から記事の体裁を一變し主として淑女の文藝に關することを掲載するよつき

韻文及び**散文**の原稿は何とぞ御投寄と願ひ升尤も本号は原稿の輻輳し過ぎたり

文學小言及び**通信**問答及び**寄書**れ各欄を臨時撤去しましたが是は決して全く廢する譯では無く次号からと矢張從前同樣加へます。

次號掲載略目

●**花おりよしき**（小說）……藤のや由縁女

●**韻文論概要**……美妙

●**阿古屋姫**（物語体の長篇韻文）……平山靜子

●**詠松島**（韻文）……碧溪閑史

其他種々前号からのつゞきも有ります

●美妙齋主人新作

○やたらじま……價郵税共十七錢

○猿面冠者……同上十錢

○敎師三昧……同上卅五錢

以上既發小說　書肆　春陽堂

○韵文　夢の天女

○雜篇　雨の日ぐらし

以上近刊、天女は春陽堂、日ぐらしは博文館から。

○大恥辱

右都れ花發兌中の小說

○韻文　山れ翁

右國民の友發兌中

教育第四十六號

明治廿四年四月廿五日發行

教育 何ゾ其苗ノ碩ナルヲ知ラザルヤ●視學者ノ資格●令孃社會ノ教育●小學教育の目的を論じ併せて其方便に及ぶ

學說 教授案内●算術略論●技藝教授ノ必要ヲ論ズ

文藝 詩四首●歌長短五首●文○木村治平君碑○笑門福聚說○探蝦錄

雜錄 新小學校令第四章小學校ノ設置●拿破崙一世の逸事談●曾佛及邂逅ノ初等教育概況●學校巡り●隨感隨筆

雜報 志士の贈位●天皇陛下臨幸學習院●興奮劑を頓服せよ●汝何をか知らん●寶神木事件●島嶼の學事●佛國懲治學舍の成蹟●日曜日の休暇とし宜しく廢すべし●美術展覽會●南州先生●全國教育會委員會●北海道教育會●秀吉の遠征●廣告數件

注意 本號ヨリ大ニ體裁ヲ改良シ益々奮テ讀者諸君ノ愛顧ニ報酬セント期セリ而シテ定價ハ從前ノ通リ一冊郵税共金七錢五厘、半年分六冊前金四十一錢、一年分同七十六錢ナリ又近日教育家諸君ノ通曉セサルベカラザル歐洲各國中頗ル我國ノ摸範トスベキ學校制度ヲ採擇シ以テ一冊ノ**號外**トシテ發行セントス今ヤ印刷既ニ成ル其發賣兩三日ニアリ諸君幸ニ一本ヲ購ヒテ參考ニ供スル所アレ但號外ノ定價亦本號ニ同ジ

發行所 東京日本橋區村松町七番地 **學海指針社**

大賣捌　東海堂　良明堂　巖々堂　信文堂　武蔵屋　東京堂

●**俳諧矯風誌**　第廿二號

●會說○矯風の心得●講義○發句に風狀風情ある事●論說○佳句の源泉○俳諧獨語○品評會の句よ就て●評林●俳況●解解●質疑●詞林●寄書◎本誌一冊價七錢◎會員よれ無料よておくる

東京日本橋區蠣殼町四番地
明倫教會內
俳諧矯風會

（遞信省認可）